

「西行桜」の《隠し本説》

岩崎雅彦

「西行桜」(世阿弥作)は、西行(ワキ)の夢に老木の桜の精(シテ)が現れる能である。この曲は『風姿花伝』物学条々の「老人」の項に

ことさら、老人の舞がかり、無上の大事なり。花はありて年寄と見ゆる、公案、くはしく習ふべし。たゞ、老木おきなに花の咲かんがごとし。

と説く老人の舞がかりの理念を具現する作品である。同じく、『風姿花伝』年来稽古条々の「五十有余」の項では、晩年の観阿弥の芸について、

凡そその頃、物数をばはや初心に譲りて、やすき所を少なくと色えてせしかども、花はいや増しに見えしなり。これ、まことに得たりし花なるがゆへに、能は、枝葉も少なく、老木になるまで、花は散らで残りしなり。これ、眼のあたり、老骨に残りし花の証拠なり。

と評しており、老木の花とは世阿弥にとつて、能役者が人生の諸段階で体現し得る芸

のうちの、至高の境地を表す言葉でもあった。つまり老木の花という比喩は、老人の物まねの形容でもあり、また老齢の役者の芸の形容でもあるわけである。

老木の花は、和歌の世界で使われて来た語である。『落窪物語』卷二に、老醜の典葉助が姫君に贈った次のような歌がある。

老木ぞと人は見るともいかでなほ

花咲き出でて君に見なれん

この歌では、老齢のわが身を老木にたとえ、それに似合わぬ若やいだ行動を花にたとえている。また源顕仲は次のような歌を詠んでいる(『永久百首』四一六)。

旧年立春

ひととせに春はふたたび立ちぬれど

老木の花はいかが咲くべき

ここでは、老木の花は、老境のわが身が若やくことを意味している。いずれの歌の場合も、老木に咲く花とは、老齢に不釣合いな行動や気持ちを表しており、老木が花を咲かせることは困難であるという認識を前

提としている。そして両首とも、少なくとも表面的には、自らの老齢を自嘲・詠嘆するという消極的な志向性を持っている。

世阿弥の言う老木の花は、老人の役や老齢の役者が見せる演技や芸のことである。

老木が花を咲かせることはきわめてむずかしいという認識は、和歌の世界と同じであるが、和歌のように老木と花との関係を不釣合いなものとするのではなく、むしろ珍しき物として積極的にとらえ、逆に最高の評価を与えているのである。

「西行桜」が『山家集』(八七)の

しづかならんと思ひける頃、花見に人々まうで来たりければ

花見にと群れつつ人の来るのみぞ

あたり桜のとがにはありける

という歌をもとに作られたことは周知の通りである。この歌が詠まれた状況については、鎌倉中期成立の伝阿仏尼筆『西行物語』(静嘉堂文庫蔵)にも

柴の編戸のあけくれば、ほとけの御むかひを、いつならんと待ちたてまつるに、

さもあらぬ昔の友、花見にとて集まるついでにも、何となき昔語りにも、心の乱る、かたもありければ、よしなしと思ひ、と記されている。

「西行桜」では、花見禁制の西行の庵室に男たち(ワキツレ)が花見に訪れ、西行が

「花見んと群れつつ人の来るのみぞ」と口ずさむ。この曲の前半は、この歌の詠まれた状況を立体化しているわけだが、この歌は「西行桜」前半の本説ではあっても、一曲全体の本説というわけではない。伊藤正義氏はこの曲の主題が後半にあること、シテは老木の精であるとともに、限りなく花を愛した西行自身とも見なすことができること、ワキとシテの一体感が見られること等を指摘されている(新潮日本古典集成「謡曲集」)。いずれも卓見と言うべきであろう。そしてこれらの構想のもとになったと思われるのが、『山家集』(九四)の次の歌である。

ふる木の桜の所々咲きたるを見て

わきて見ん老木は花もあはれなり

今いくたびか春にあふべき

この歌は次の藤原清輔の歌(『清輔集』四二)を本歌としている。

見花述懐

身をつめば老木の花ぞあはれなる

いまいくとせか春にあふべき

清輔の歌は、老木の花を見てそれをわが身とひき比べ、おたがいの余命の少ないことを嘆いたもので、老木にわが身を投影し、木と自分自身を一体化した歌である。西行の歌も清輔の歌の表現と主題をほぼ踏襲しているが、詞書や初句のひびきが、古木の

桜に対する哀惜の念をより強く感じさせる。シテの「恥づかしや老木らうぼくの、花も少なく枝朽ちて」という言葉は、この詞書と歌を踏まえた表現に違いない。ワキの「花もひと木、われもひとり」という老木とわが身を重ね合わせた述懐もまた同様である。

この歌は『続古今集』や、文明十二年(一四八〇)奥書の『西行物語』(宮内庁書陵部蔵)、明応九年(一五〇〇)海田采女筆『西行物語絵巻』(原本は佚亡。宗達等の模本が現存する)、永正六年(一五〇九)奥書『西行物語』(神宮文庫蔵)にも採られており、著名なものであった。神宮文庫本では詞書に当たる部分が次のようになっている。

又、枯れたるやうに、としふりたる枝に、

ひとふさ咲きけるを見るに、わが身の上と、哀れにおほえて

「西行桜」の前半は「花見にと」の歌を本説とし、後半は「わきて見ん」の歌を本説としていると言えるだろう。この本説の二本立てが「西行桜」の特徴というところになる。「花見にと」の歌がワキによって曲中で歌われるのに対して、「わきて見ん」の歌は、はつきりとそれとわかる形で使われているわけではない。前者が表に現れた本説とするなら、後者は《隠し本説》とでも命名することができようか。そしてこのように歌の扱ひ方に変化をつけたのは、にぎや

かな前半と閑寂な後半を対照させるという一曲の構成に合わせ、前半と後半をそれぞれ異なった手法で作ろうという意図があったためであろう。

シテはワキの歌に対して「桜ののがのなき」ことを弁明するために現れる。シテがワキの詠歌を難じる形で現れるのは「江口」などにも見られる能の常套的な方法であるが、この曲の場合はさらに、「わきて見ん」の歌の象徴とも言えるシテにワキの「花見んと」の歌を復唱させることによって、本来は無関係である両首を有機的に結びつけ、対照的な前半と後半をみごとに融合させた上で場面転換を行っていると言える。

「西行桜」のシテが老翁の姿であるのは、能では「高砂」や「老松」のように木の精を老体とする考え方があること、和歌世界で老木の花という語が老人を指すことなどが背景にあり、そして直接には西行が老木とわが身とを重ね合わせて詠んだ「わきて見ん」の歌にのつとつた趣向と考えることができるだろう。

※シテが「朽ちたる花のうつほ木」から現れることについては、岩崎『守屋』と『国栖』のうつほ隠れ(鏡仙443号、平成8・5)をご覧いただければ幸いである。

(法政大学能楽研究所員)